

新疆ニヤ遺跡出土の仏教文献について (1)

蓮 池 利 隆

I. 従来の研究

従来、ニヤ遺跡出土のカローシュティー文字資料についての研究は1992年出版の『カローシュティー・インスクリプション』¹⁾を基にすすめられてきた。その中心は俗文書(勅令や官庁間の通達書及び物品、特に租税品の目録)の研究に置かれていた。しかし、既に、ラプソンはスタイン番号511番木簡が仏教を扱ったものであり、『アヴァダーナ・シャタカ』第13章「スナートラ(澡浴)」,さらには同第50章・100章の仏陀への蒸風呂供養の題材と関連性があることを指摘している。その後の研究としては、パロウが1940年に『カローシュティー・インスクリプション』を英訳している²⁾が、完全な訳ではない。今回は『アヴァダーナ・シャタカ』とその異本である『ラトナマラー・アヴァダーナ』,そして漢訳の2本,計4本とNo.511木簡を比較検討した。それによってニヤ出土仏教文献の特徴を明らかにしていくことができると考えている。

II. No.511木簡

『アヴァダーナ・シャタカ』第13章「スナートラ(澡浴)」の概要は、厳しい旱魃に見舞われた際に、国王が仏に澡浴を供養し、その功德に感じた帝釈天が雨を降らした。さらに、国王は仏が洗浴した水を諸国に分け与え、仏塔を建立させた、といった内容である。これは漢訳の

『撰集百緣経』³⁾ 呉月支優婆塞支謙訳の第二卷十五「法護王請仏洗浴緣」に相当する。また、

『雜寶藏経』⁴⁾ 元魏西域三蔵吉迦夜共曇曜訳の第六卷「迦歩王国天旱浴仏得雨緣」にも同じような題材が扱われている。

前者の訳経年代は呉黄武二～建興二(A.D.223～253),『雜寶藏経』は宋の明帝泰豫元年(A.D.472)の訳である。この両年代は、ニヤ出土の木簡の中に記された泰始5年(A.D.269)と前後しており、仏への澡浴供養を主題とした経典が広

く伝播していたことを示している。ラプソンは題材の共通性を指摘しているのみで、具体的な内容比較まではおこなっていない。また、英訳を試みたバロウも十分な説明を加えていない。そこで先ず、その No. 511 木簡の一部を引用してみたい。なお No. 511 木簡表の和訳に関してはバロウの英訳を参照した。

pratyeka budha vivegam āśrta ekābhirāma girikaṃtarālaya/
svakartha yukta śamathe gune rata teṣaṃ pi pūjā bhavatu svayambhu [na]//

辟支仏は知識に固執し、山の洞穴に篋もり、独り喜ぶ。自らの目的に縛られ、静けさと功徳を楽しむ。しかし、彼らの自存性は尊ばれるべきである。(第 5 偈)

koḍinya gotra prathama śrāvaka [...] teṣaṃ ca yo āsi subhādra pañcama/
etasmi abhyāmdare ye atita jinorasa te pi bhavaṃtu puṇjita//

橋陳如は最初の声聞であり、また、その(声聞)中で善賢は最後の者であった。この世の中で、彼らは過去の者たちではあるが、しかし、勝者の息子であるその者たちも尊ばれるべきである。(第 6 偈)

sataṃ subhīchu bhavatu samākula imdraṃ vivṛdhi abhivaṛṣatu makhi/
udeṃtu sasya cā jayāya pārthiva ciraṃ sa dhāma sugatasya tiṣṭha [...] tu//

満ち溢れた豊穡なるべし。供養の場に、帝釈を促し雨降らすべし。

穀物は伸び、王は勝利(する)。善逝のかの法は永く住すべし。(第12偈)

最初の 2 偈には辟支仏・声聞への大乘仏教的立場からの批判が取りあげられている。このことから少なくとも次の 2 点が推測されるであろう。一つには、筆者の周辺に大乘仏教的立場がすでにあったこと、二つには、筆者自身は部派仏教的立場にあったこと、である。この部分は梵文 2 本、漢訳 2 本と一致している。

次に、最後の第12偈も 4 本の内容と対応する。ただし、これらの梵本テキストや漢訳では共通して仏塔供養について述べられているのに対し、No. 511 木簡にはそれに対応する部分が見あたらない。一方、この木簡が出土したニヤ遺跡には仏塔とみられる遺構が残されている。その遺構の年代と木簡との年代との前後関係についてはまだ検討されるべき問題が残されているようである。しかし、もし同時代のものであったとすれば、木簡に仏塔供養が書かれなかったところに、筆者の仏教的立場が反映されていると見ることもできるかもしれない。

さらに、No. 511 木簡の裏面には『南伝大蔵経』第11巻下、中部經典四『分別布施経』(“Majjhima-Nikāya” Ⅲ, 253, ‘Dakkhiṇāvibhaṅgasutta’)・漢訳中阿含一八〇『瞿曇彌経』(大正①721), 分別布施経(大正①903)と共通の題材である、ゴータミーの衣供養が扱われている。その中に、

[ye] cakravartī jinana anuvart.. [ki .ti] abhiṃna marga sugate paripālayamti/
dukhā ēa dukhaprabhava ēa nirodha marga te praṇa pārammigate upalābhi
saṃghe/

勝利者達の車輪を転じ、苦と苦の原因と滅と道の不壊の道を守護する善逝達、その者達は般若波羅蜜に到達して僧伽に受け入れられる。(第9偈)

ここには、四聖諦が説かれているが、このように、集諦を *duḥkha prabhava* で表すものとしては、『南伝大蔵経』の中に、わずかに2件ではあるが *dukkhasa sambhavam* という言い方で「苦の発生」を示す用例がある。それはスッタニパータ・マハーヴァッガ「二種随観経」(*Dvayatānupassanāsutta*)である。これはプラークリット『ダンマ・パダ』(カローシュティー文字資料)が同じ小部經典所収の写本であったことと考え合わせると、ニヤ出土仏教文献の性格を知る上で示唆に富むものと考えられる。

さらに、注目すべきことは、No. 511木簡裏面第9偈の後半に「この四聖諦を守護する者は般若波羅蜜に到り僧伽に受け入れられる」とあることである。ここにも木簡筆者の仏教上の立場が表れているように思われる。それは、木簡表面の第5・6偈について述べたのと同様、大乘仏教的存在を意識しながらも部派仏教的立場に立とうとするものである。このことが、部派仏教の四聖諦を説きながらも般若波羅蜜を取り込み、最終的には僧伽に受け入れられることを説くことにもつながってくると考えられる。

以上、ニヤ遺跡出土のカローシュティー文字資料・No. 511木簡について検討を加えてきたが、それが仏教文献であることは明らかである。しかし、他のテキストとの比較ではそれ程一致が見られなかった。そのようなテキストの独自性がどのような意味を持つのかということに関しては、今後更に検討を重ねて行かねばならないだろう。

- 1) A.M. Boyer, E.J. Rapson & P.S. Noble, *Kharoṣṭhī Inscriptions, Discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*. 3 vols. Oxford 1920, 1927, 1929.
- 2) T. Burrow, "A translation of the Kharoṣṭhī documents from Chinese Turkestan" London, 1940.
- 3) 『撰集百緣経』(「大正新脩大蔵経」第4巻, No. 200)
- 4) 『雜寶蔵経』(「大正新脩大蔵経」第4巻, No. 203)

〈キーワード〉 カローシュティー文字資料, 澡浴供養, 四聖諦

(龍谷大学非常勤講師)